

カツオ 中西部太平洋

Skipjack, *Katsuwonus pelamis*

管理・関係機関

中西部太平洋まぐろ類委員会 (WCPFC)
太平洋共同体事務局 (SPC)

生物学的特性

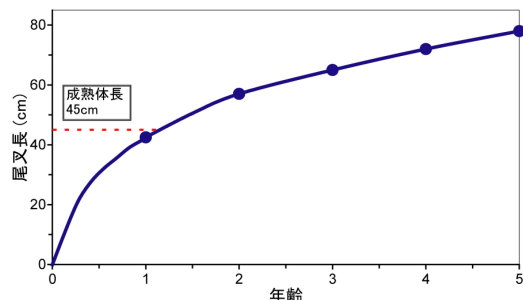
- 体長・体重：尾叉長 100 cm・25 kg
- 寿命：6 歳以上
- 成熟開始年齢：1.5 歳
- 産卵期・産卵場：表面水温 24℃以上の海域
- 索餌期・索餌場：表面水温 15℃以上の海域
- 食性：動物プランクトン、魚類、甲殻類、頭足類
- 捕食者：まぐろ・かじき類、さめ類、海鳥類など

利用・用途

缶詰や節原料、刺身・たたきによる生食

漁業の特徴

1950 年代から 1970 年代までは主に日本の竿釣りが中心で漁獲量が伸びていった。1980 年代にはいと漁場の拡大に伴う活餌保持の問題と燃油高騰などの経済的要因から遠洋竿釣り漁船数が減少して竿釣り漁獲量の伸びが停滞した。竿釣りの漁獲量は、1980 年代後半以降は緩やかに減少している。1980 年代には各国のまき網船による熱帯水域漁場の開発が始まって漁獲量の急増期に入り、以降現在までまき網の漁獲量は増加している。竿釣りは、2005 年頃まで日本が約 6 割を占めていたが、次第に減少し、2006 年以降はインドネシアが最も漁獲量が多くなり、近年の日本が占める割合は 4～5 割ほどになっている。まき網については米国、韓国、台湾および日本の遠洋漁業国が近年の漁獲量の 5～6 割を占め、他はインドネシア、フィリピンが多い。



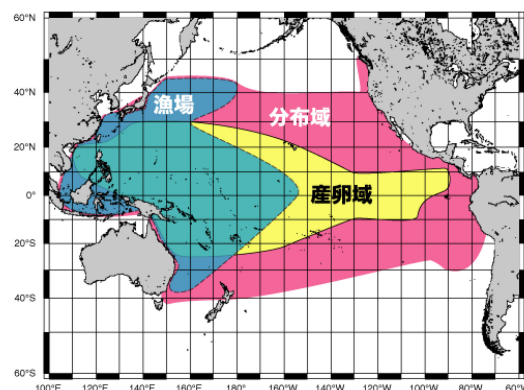
中西部太平洋のカツオの成長パターン

漁獲の動向

漁獲量は、主に竿釣りにより、1960 年前後には 10 万～17 万トン、1970 年には 20 万トンを超えた。1970 年代後半には竿釣りが 30 万トンを超える水準となり、全体では 40 万トン台となった。1980 年代以降はまき網による漁獲量が急増し、1990 年代には 100 万トン前後に増大、さらに 2009 年には 180 万トン近くに達したが、2011 年にかけて減少した後、再び増加に転じ、2015 年は 180 万トンと過去最高を記録した 2014 年から約 20% 減少した。2017 年の漁法別漁獲量 (暫定値) は、まき網が 128 万トンで 79%、竿釣りが 12 万トンで約 8%、その他の漁業が 21 万トンで約 13% である。2017 年の国別漁獲量は、2009 年を除き 2010 年までは日本が最大であったが、2011 年には 24 万トンに減少し、インドネシアが 27 万トンで最大となり、これ以降も高く推移している。韓国、フィリピン、台湾、米国は近年それぞれ 15 万～25 万トンほど漁獲している。日本沿岸域のひき縄による 2017 年の漁獲量は 1,443 トンであり、日本近海漁獲量の約 2% 程度である。

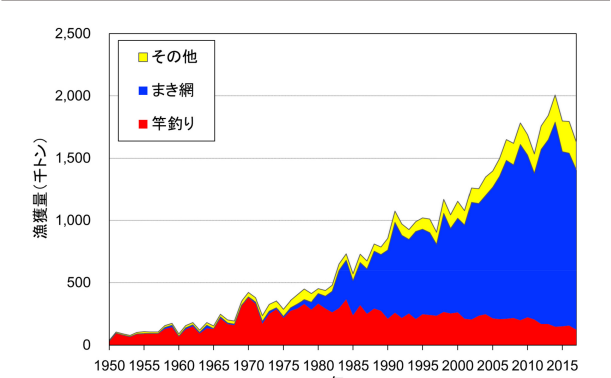
資源状態

最新の資源評価は SPC の専門家グループにより 2016 年に行われ、Multifan-CL を用いた 1972 年から 2015 年について実施された。SPC は、13 通りの評価結果を示し、どの結果も同じようにありえるとしつつも、その中の 1 つを取り上げ、資源は過剰漁獲の状態ではなく、乱獲状態にも陥っていない。また、資源状況は改善し、漁業による圧力は減少していると評価した。8 月の WCPFC 科学小委員会においては、SPC が選んだ参照事例の評価結果に対し、日本、中国、台湾は、どの評価結果もあり得るのであれば、その上限と下限の範囲で示すべき、また評価モデルの設定などに問題があり、SPC が選んだ評価結果は漁業者との感覚とも大きく乖離しており、支持できないと主張した。その結果、参照事例の評価結果は承認されなかった。また科学小委員会は、SPC が示した計算結果のうち、いくつかは現在の産卵資源量が管理目標を下回っていることを留意するとともに、分布域縮小に関する研究の継続などを勧告した。漁獲量は過去 20 年間継続して 100 万トンを超えていること、設定の異なる 72 通りの結果から最近年 (2012-2015) の産卵親魚量が SB_{MSY} の 1.46 倍 (中央値) であることから資源水準を高位であると判断した。ただし、参照事例の評価結果のみに基づいた資源状態については合意されていないことから、資源動向については検討中とした。

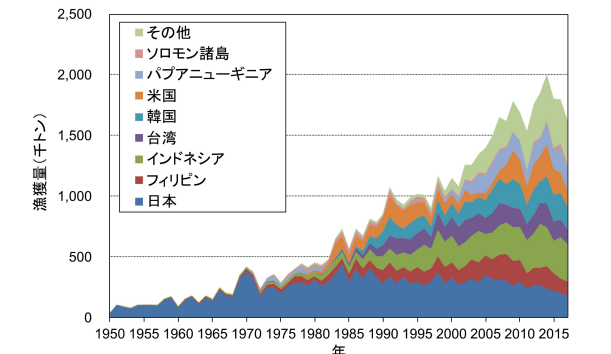


太平洋におけるカツオの分布域、産卵域および漁場

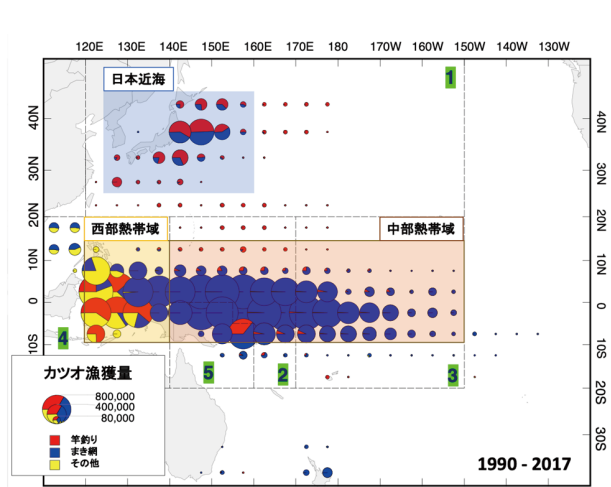
管理方策
WCPFC では、2018 年 12 月の第 15 回年次会合において、メバチ・キハダ・カツオの保存管理措置の見直しが議論され、2018 年の主要な措置を 2019 年・2020 年の 2 年間延長する措置が合意された。主な措置の内容は、まき網漁業による EEZ 内、公海域 FAD 禁漁期間はそれぞれ 3 ヶ月と 5 ヶ月、公海操業日数制限は先進国に加え、島嶼国がチャーターする船にも適用、FAD 個数制限を 1 隻あたり常時 350 個以下とすることなどである。 2015 年 12 月の WCPFC 第 12 回年次会合においては、カツオの長期管理目標として、①漁業がないと仮定して推定した現在の資源量の 50%を暫定的な目標とすること、②この管理目標値は遅くとも 2019 年に見直され、それ以降も適宜見直されること、③見直しに際しては、日本沿岸域への来遊状況などに関する科学小委員会の勧告が考慮されること、が合意されている。



中西部太平洋におけるカツオの主要漁法別漁獲量の経年変化



中西部太平洋におけるカツオの国別漁獲量年変化



中西部太平洋におけるカツオの漁法別漁獲分布(1990～2017年))
赤：竿釣り、青：まき網、黄：その他

カツオ（中西部太平洋）の資源の現況（要約表）	
資源水準	高位
資源動向	検討中
世界の漁獲量 (最近 5 年間)	162.7 万～200.8 万トン 最近 (2017) 年：162.7 万トン 平均：181.6 万トン (2013～2017 年)
我が国の漁獲量 (最近 5 年間)	18.2 万～26.6 万トン 最近 (2017) 年：18.2 万トン 平均：22.0 万トン (2013～2017 年)
管理目標	(暫定) 漁業がないと仮定して推定した現在の資源量の 50%
資源評価の方法	統合モデル (Multifan-CL) による解析
資源の状態	2016 年科学小委員会では合意できず
管理措置	■メバチ・キハダ・カツオの保存管理措置は、2019 年・2020 年の 2 年間の措置として、まき網漁業による EEZ 内、公海域 FAD 禁漁期間がそれぞれ 3 ヶ月と 5 ヶ月、公海操業日数制限は先進国に加え、島嶼国がチャーターする船にも適用、FAD 個数制限を 1 隻あたり常時 350 個以下とすることが決まった (FAD 操業規制はメバチ幼魚死亡率削減を目的とするが、本種にも影響を与えている)。 ■長期管理目標として、①漁業がないと仮定して推定した現在の資源量の 50%を暫定的な目標とすること、②この管理目標値は遅くとも 2019 年に見直され、それ以降も適宜見直されること、③見直しに際しては、日本沿岸域への来遊状況などに関する科学委員会の勧告が考慮されることについて、2015 年第 12 回年次会合で合意。
最新の資源評価年	2016 年
次回の資源評価年	2019 年